

CULTURE

文化

まつした・たつこ 1965年、名古屋生まれ。名古屋大学大学院文学研究科博士後期課程中退。専門は多文化教育、応用言語学、日本語。主な論文に「留学生のためのノンシヤル・サポートと日本語教育」など。神奈川県相模原市在住。今秋まで北京師範大学で在外研修中。

松下 達彦



教科書問題——二つの視点

日本の歴史教科書問題が国内外で波紋を広げている。歴史教育、歴史認識という同時代の問題をどう考えればいいのか。近藤孝弘・松本達彦・松本達彦の寄稿もあつた。

核実験についての肯定的な意見は、中国では学歴の高低を問わず一般的で、被爆国で核の恐怖を教えられてきたものとしては、その感覚のズレに驚く。これは決して中国のタカ派の発言などではない。しかし、歴史認識という過去の政治問題と捉われやすいが、実は現実のコミュニケーション問題なのである。

ズレの原因を意識し 共通の視点と目標を

問題なのである。

ことがわかる。

最近の中国や韓国における歴史認識を求める声は圧倒的だ。私は去年北京に滞在しているが、歴史教科書や韓国神社参拝の問題は中国の報道でも大きく取り上げられており、「異文化と言った日本」というイメージを再生産し続けている。

コミュニケーション問題としての 歴史認識

しかしこれまで大学で留学生教育などに携わってきた。来日留学生には韓国・中国の学生が非常に多く、ほとんどは現代的な普通話の若者たちであるが、そんな彼らでも歴史認識の問題には敏感に反応する。昨年五月の森前首相の「神の国」発言の時には、授業で首相の説明会見を取り上げられるくらいであった。

善し悪しの問題ではなく、国を愛する感情が国民の共有する歴史の記憶の土壌に根をたくわえているのである。韓国人の人々の感覚もこれに近い。皮肉にもこの感覚は日本人には理解されにくいのだ。

個人や学校教育の当面の課題としては「互いのイメージを逆なでする発言を止め、関係国の歴史家が共同で歴史の記述に取り組む努力と、それに対する各国政府の積極

的姿勢が欠かさない。それがなければ、この問題は人びとのコミュニケーション問題として、日本の外交課題としても消えることはないであろう。